
友とともにゾンビ

星 掌造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友とともにゾンビ

【Nコード】

N5873Y

【作者名】

星 掌造

【あらすじ】

中学校二年生の桜木 龍治とその親友、川端 真司はクラスメイト35人と共に林間学校にやってくる。しかし、クラスメイト達が何らかの理由によってゾンビと化する。

彼らは無事に家へ戻れるのか？

ゾンビと化した理由は？

不定期連載です。

いまだ執筆中ですが頑張って書きますので、よろしくお願いします。

O n e d a y 陸の孤島

森の木を切り倒し、木に囲まれた中にその建物はあった。

桜木 龍児を乗せたバスはその建物の近くに止まると、きた道をさつさと戻って行った。

「あーあ…帰れるのは、一週間後か。」

隣で親友の川端 真司が呟いた。

中学二年の秋、二年生最大のイベント林間学校で大谷中学の彼ら35人はY県の山奥に来ていた。

バスを借りて、高速道路を走り続け、民家を通り、山を越え、道なき道を進み、ようやくこの宿泊施設に着いたのだ。

歩いて戻れば遭難するというのは山登りをしたことのない桜木にもわかった。

「部屋に荷物をおいて、松の家の前に五分後に集合。では解散。」

担任の青木先生は51歳のベテランの先生で167センチの桜木、川端よりも小さいながら、威圧感のある顔によって、存在感は抜群だった。

「遅れないようにね。」

体育担当の副担任でもある新人先生の田中は

みんなが施設に入り始めた頃に言い出した。そんなのお構いなしに施設へ入った。

「床抜けないよな…。」

川端の冗談も今回は成り立たなかった。

男子の部屋である竹の部屋があまりにも埃っぽく汚かったため、喘息持ちの佐藤が薬を呑んだのを桜木は確認していた。竹の部屋は施設としては、竹の部屋という広い部屋以外に

食堂、風呂のそれぞれ部屋もあった。

荷物をさっさと置くと、先生のいる松の家に急いで向かった。

「朝早くから出て、眠たい人もいるかも知れんが、そのおかげでまだ1時だ。予定より早く探索時間を行う。」

「班に別れて下さい。」

青木に遠慮しがちに田中が言つと35人はザワザワとしながら班に別れていった。

「5時までに戻ってくること。いいな？」

青木の言葉にうーす、としか聞こえないやる気のない返事をかますと班はそれぞれの進行方向へ歩き出した。

全部で七班あるうちの四班は桜木と川端の二人と中谷、関野、水口の男子五人という夢のない班構成となっていた。別に自分の顔はイケメンではないと思うが、桜木の本音としては、心の中では好きと思いつづけている松枝 咲と同じ班になりたいとは思っていたが、

楽しめればいいや、とも思っていた。

「山だけというのも、なかなかハードだな。」

「水口が山好きだとは知らなかったもんで……。」
川端の嘆きに桜木は言った。

水口はいわゆる使い勝手のよい奴で、他の人が嫌がる事やめんどく
がることをやってくれる、そのわりに面白いので班のリーダーを桜
木と川端は押し付けたのであった。しかし、水口の隠れ山好きによ
って、四班は山の頂上を目指す事となってしまうたのだった。

それでも決められないよりはマシか……と川端は呟いた。

山とは言っても、言うまで高い山ではないので水口は大したことな
さそうだが、残りの四人は水口とかなり差を広げ、歩いていた。

休憩も挟んで、一時間半後、ようやく頂上に到着した。時間潰しの
為、40分程雑談をすると山を下り始めた。

「やべ、降ってきたぞ。」

山の天気は変わりやすいとは、よく言ったも
ので、さっきまで晴れていた空は、いまは雲に覆われ、雨が降って
いた。

四班は少し早歩きで、山を一時間で下った。

余談だが、このとき川端が勢いよくこけて、服が泥だらけになり、
上半身裸で戻ってくるという伝説を作りだしていた。

結果的に、四時過ぎ程に戻ってきてしまったが、他の班も同じぐら
いだったので、特に気にしなかった。

最後の班が五時を過ぎて到着すると、男子、女子の施設で、お弁当
を食べ始めた。

「明日からは自分で作るのか…。案外、楽しそうだな。」

川端は弁当を食べながら言った。

「そうかあ?」

桜木は思わなかったが、あちらこちらでそういう声が聞こえている
のは、やはり男の性なのかもしれない。

One day 感染

ギヤヤアアア

人間が出せるとは思えない叫び声が遠くで聞こえると、しばしの沈黙のあと、松の部屋の男子は騒然となった。

「な、なあ、いまの女子がいる梅の部屋から聞こえたよな。」

否、それは間違いとなる。

ウオアアアアツ？

明らかにそばで叫び声が聞こえた。竹の部屋じゃない、施設内だった。声のした方へみんなが歩き出した。桜木、川端はそれについて行った。

ウウウウアアアツ！

呻き声と叫び声がまた聞こえた。

「風呂場か？」

城田という、ホラーなどまったく信じない男子が風呂場へ先頭きつて入った。

「この奥…だな。」

城田の後にみんなも続いて、覗いた。脱衣所には誰かが履いていた服が棚にしまつてあるだけであった。

ガラリッ、ドアが開いた音がすると、見るより前に桜木の頬に水がついた。それを手で触り、見てみると、手が赤く染まった。

血？

そう驚き、風呂場を見てみた。

「城田？うつ…」

気持ち悪いなんて言葉で表せられなかった。身体がボロボロになった人が、首から血が出ている城田を喰っているのだ。何人かのクラスの人はすでに目を背けた。

「おい、あれって益川だろ。」

川端の言葉にもう一度身体がボロボロになっている人間を見た。

目玉は落ちかけていて、皮膚は青と黒に変色し、剥がれ落ちていたが、輪郭や身長は確かに、スポーツの出来た益川であった。

「えっ、ま、マジかよ。」

桜木は川端に伝えるのも兼ねて言ったが川端は益川と城田の状態から恐怖で目が離れなくなっていた。

「川端…やべえ。」

「わかってるよ？」

「ちげーよ？」

言葉と共に、川端を揺すった。それによって桜木を見た川端に、桜木は風呂場の奥を指差した。

「何かいる……。やつべ??」

桜木と川端は脱衣所を出ようとみんなをかき分け始めた。

一番前にいた桜木と川端がいなくなったおかげで、他のみんなも風呂場の奥を確認し、逃げ始めた。

「早くどけ？」

引っ込み思案な性格なはずの大川が叫んでいる。

うわあああ?と誰かの叫び声が聞こえ、血が降ってきた。

やばい、やばい、やばい、やばい。

桜木は人をなにがなんでも掻き分けて、脱衣所から出て、玄関へ向かおうとするが、みんなが玄関で詰まっている。

脱衣所から他の人も出てきて、竹の部屋へ逃げる奴も出てきた。窓から逃げるつもりなのだ。

しかし、窓は確か三つしかなかったはず、すでに脱衣所から人間ではない物が這い出してきていた。

間に合わねえ？

O n e d a y 迫る恐怖

桜木は叫ぶと、食堂に逃げ込み隠れた。

自分の事でいっぱいになっていたが、川端も食堂へ逃げてきていた。川端が鍵のないドアを閉めた。

「な、なんなんだあれは？」

川端は桜木に聞いたが、桜木は答えなかった。

いやむしろ静かにしろという意味を込めて、指を口の前で立てた。川端は口を閉めた。

人間とは思えない彼らに音が聞こえたら人間がそこにいるという発想があるのかどうかわからないが、とりあえず鍵のない食堂にいる今、最善を尽くすしかなかった。

「窓もないのか…。」

桜木が川端に囁いた。

「おい」川端が答える前に、聞き覚えのある声がした。

桜木が辺りを見ますと、川端が横に長い机の下を指差した。

「中谷？」

桜木がつい大きな声で言うと、中谷がしっ、と桜木同様に指を口の前で立てた。

桜木はまずそんな顔すると、川端と共に机の下に入った。

ドアから椅子と机で死角になっているので、少しは安全そうだった。

「桜木、川端。これ持つとけ。」

やはり、小さな声中谷が包丁を渡してきた。

「あ、ありがとう。」

桜木は礼を言った。

桜木、川端は無二の親友であったが、中谷 陸ともかなり仲が良かった。

桜木は、中谷ほど頭の回転が良いやつはいないのではないか、と思っていた。

身長は桜木より小さく、イケメンでもない、頭もそこそこでいわゆる普通の中学生であったが、場への適応力や発想は並ではなかった。

「中谷は、いつからここに？」

川端が中谷に聞いた。

「二人が部屋に入ってくる少し前だよ。玄関や窓からは逃げられなさそうだったから。」

中谷はいまだ、ドアを凝視していた。

「まずいんじゃない？」

川端がドアを見ている中谷に言った。桜木もドアを見ているが、ただ横に引くだけのドアがさっきに比べて、あきらかに…

「押されてるな…。」

一体、何人の人が力をかけているのだ、というか横に引くことはできないのに、それだけここに力を掛けるといのは、やはりばれて
いるのだろうか？

「なあ、さっきからなかなか言えなかったんだけど…」

川端が二人に何か伝えようとした瞬間

ガタン？

ドアが外れ、倒れたドアからゆっくり奴らが立ち上がってきた。

「う、うつつうつつ」

言葉ではない、奴らが発する音は嫌に恐怖心を与えた。

O n e d a y 脱出作戦

三人とも体を震わせているが、息を殺した。

沈黙の中、ペタリペタリという足音だけがする。

食堂にいただけでも六体はいるだろうか…。

廊下は死角になっているので、姿は見えないが廊下の軋み具合から、かなりの数は居そうだった。

「駄目だ、俺らばれてる。」

中谷が言った。

しかし、奴らはさっきから体を右に左に大きく振りながらドアの近くを歩いているだけであつた。

「とても、ばれてるようには…。」

「いや、さっきに比べて、廊下の軋む音が大きくなってる。」

つまり、食堂に人が食い物がある…。奴らはそう踏んでいるのだ。

「それって…ま、まずいんじゃないの？」

川端は焦り始めた。桜木も本当は心底震えていた。

「桜木、川端、一つ作戦がある。ただ説明するだけの時間がない。」

俺についてきてくれ。」

中谷のついてきてくれ。という言葉に桜木は全てを託した。

中谷は机の下からゆっくりと出ると、突然、立ち上がり、ナイフを投げた。

クルリクルリとナイフは回転しながら奴らへと向かって行く。

奴らは避けようという動きを見せず、奴ら1体へもろにナイフが刺さった。

しかし、そいつは特に何もなかったようにナイフをそのまま放置していた。

「あああああう」

奴らがエサを見つけたとでも言うかのように、呻き声を上げ、桜木達の方へ、歩き出した。

「ど、どうすりゃいい。」

川端は奴らを見ながら言った。

「な、中谷？中谷？」

中谷は横にはもういなかった、辺りを急いで見渡すと、奥のキッチンでカチカチと何かしていた。

桜木と川端は前から向かってくる奴らから逃げようと思つ気持ちよ

りも中谷の作戦が気になり、中谷のところへ向かおうとした。

「まだ、そこにいる？」

中谷が大声で叫んだ。

しかし、奴らはすぐ近くにまで来ている。

桜木は腕を斬り落とした。

「ほ、包丁ってよく切れるんだな。」

川端はかなりパニックになり、何回も刺しまくっていたが、奴らが引っ掻こうと腕を振ってきた為、尻餅をついた。

「こっちにきて？はやくしろ？」

奴らがまさに目と鼻の先なったところで中谷の方へ、桜木は包丁を投げ捨て、川端は腰が抜けている為、這ってきた。

中谷の近くで冷静に見てみると、ドアの外にも、食堂にも奴らが溢れかえっていた。

「ど、どうするんだ、中谷。」

すると、突如、ピピピピピという音があった。

「よし、奴らに突っ込め。」

はー？桜木も川端も大声で叫んだ。

「そんな馬鹿言っな、自殺行為じゃねえか…」

川端もようやく落ち着きを取り戻したようだった。

「いいか、出来る限り、奥に突っ込みたい。テーブルに乗ってから、ジャンプするぞ…その後は、逃げろ。」

中谷の言葉に、桜木は肩を掴んで聞いた。

「助かるんだな？」

中谷はゆっくりと頷いた。

信じるしかない…。桜木は覚悟を決めた。

「行くぞ、川端？」

川端は大泣きしながら、頷いた。

中谷が先陣切って、走りだした。

奴らの真横をギリギリで通過してテーブルに三人が乗ると、一気に走り出して、三人は翔んだ…。

桜木は自分の足が切られてる事に飛びながら気がついた。

ふと、生きてきた全ての記憶が浮かび上がった。走馬灯というやつか…。

そんな中、ゆつくりと時間が過ぎて行く。

グニャリ…と奴らの首が変な方向へ折れた。

自分の体の下もゾンビ、上も横もゾンビ…。

「し、し、死、死にたくない？」

カチッ！

小さな、小さな音であった。

しかしその直後、奴らの合間から炎が龍のように舞うのが見えた。

暑い、息も出来ない。

狭い食堂は完全に火で万杯になり、奴らが燃えていた。

龍のような火が消えると、とてつもなく、臭かった。

「逃げるぞ！」

近くのゾンビは体が溶けていて、動けなくなっていた。

中谷が、ゾンビを押し抜けて逃げ出した。

桜木はもはや思考は働いていなかった。

ただ生きていたいという本能が体を動かしていた。

廊下にも玄関にもいまだ奴らはいたが、さっきより、動きはあきらかに遅い。

腕が振り落とされてくるが、なにがなんでも避けていく。

燃えて脆くなった玄関のドアに中谷が突っ込むが壊れなかったらしい。

「うおおおおお？」

桜木が走った勢いのまま、扉を蹴っ飛ばした。

「外れた、外れたぞ。桜木？」

中谷が歓喜の声を上げた。

しかし喜ぶ中谷の傍ら、桜木はあることに気が付いた。

「か、川端？川端は…？」

中谷は、はっ、となった。

施設の中を振り返って探すか、奴らの姿が見えるだけであつた。

「くそっ…」

中谷が太ももを叩いた。

「うおおおおお？」

奴らの上を人が飛んだ。

One day 脱出作戦（後書き）

五話目か六話目で、One dayを終えればいいな（――；）
と思っています

五話目は21日投稿予定

（予定通り投稿が行われない場合もございます）

One day 女子力

「か、川端？」

ある記憶がフラッシュバックした。

そうだ、あの綺麗なスライディングポーズは
野球部に所属する川端、彼がセーフティバントを決めるときに見せるものだ。

ズザザッ

川端が桜木の真横に滑り込んできた。

「か、川端…。セーフだ。」

川端はいまだ、地面に顔を埋めたままであったが、右手の親指が静かに立った。

「桜木、川端、奴らが来た。とりあえず、走るぞ！」

走りだしたはいいが、どこへ行けばいいのだ…。

いや…答えは簡単だ、奴らのいないところに違いない。

ただこの施設は行ける場所が少ない。さっそく、道が二手に別れていた。

「どつちにいく？」

川端が言った。

女子がいる梅の部屋、多分、あっちも同じ状況だとすれば、行く訳にはいかない。
すると、簡単だ。左はない。

「右だ。右へ進もう。」

桜木が答え、再び走りだそうとしたときだった。

「ま、まって…まって？」

女子の声がして、左の道に人影が見えた。
中谷が警戒を強める。

「えっ、咲さん…」

現れたのは、クラスメートの女子三人だった。その中には、桜木が好きな松枝 咲もいた。

「た、助けて…」

女子から言葉として聞こえたのはそれだけで、あとはただ泣いているだけだった。

「あうああああ」

奴らがやってきた。

いやー？と女子達が叫び、パニックになっていく。

「まずい。よ、よし、みんなついてきてくれよ。」

中谷がみんなを落ち着かせ、再び走る準備に入った。

「さ、咲さん。大丈夫…？」

コクリ、と小さく頷いた。

か…かわいい…

こんなこと思っている暇じゃない。

それでもそう思わせる咲さんの力は偉大だった。

O n e d a y 女子力（後書き）

なんだかんだでギリギリ20日に間に合わせました。

今回はストックを作る必要もあつて、量が少ないですが、おかげさまでかなり話の構想も固まり、ハイスピードで書いています。

ですので、これからも応援よろしくお願いします。

次回は20日か21日に投稿予定です。

O n e d a y 漆黒の疾走

「桜木行くぞ!」

あ、ああ、と頷き、再び走り出した。

女子が加わったことにより、さっきに比べれば明らかにスピードは落ちていたが、奴らの声は聞こえなくなってきた。

「トンネル入るぞ?」

一番前を走る川端が言った。

「奴らまだ追ってきてる…」

桜木は耳が良いのが自慢で、奴らと距離が取れた今でも、奴らの呻き声が聞こえた。

「みんな手を繋いで。トンネルの中、想像以上に暗いぞ。」

気付けば、日は沈み、夜は更けて暗くなっていた。トンネルの中には灯りはなく、まさに一寸先は闇状態であった。

幸せだ…。

右手は咲さん、左手は桜木が一番後ろになったので、誰もいなかった。

「行くぞ?」

川端が先頭で、ペースメーカーとなり歩き出した。

自分達の足音がかなり響く。

しかし、桜木は咲さんに自分の心臓の音を聞かれるのではないかと
言うぐらいドキドキしていた。

このトンネルはみんなが考えているよりも長かった

「あうあああうあ？」

トンネルの中までや、奴らが来ている。

「川端、走ろう？」

「みんなついて来いよ？」

川端が中谷に言われスピードを上げる。

自分達の足音でしつかりとは聞けないが、奴らの呻き声と足音が聞
こえている。

しかも、それがだんだんと大きくなってきている

さすがに自分達も、疲れて来てしまったのであろうか。

「川端！奴らが来てるもつと急げ。」

「え、ああ…いや、かなり早く走ってるんだが…。」

手を繋いでいるから、早く走っているけど、遅いのか…。

いや、だが何かおかしい…。

川端がペースメーカーになり、それに引かれる事によって、トンネルに入る前の、女子が加わる前よりは、明らかにスピードは上がっているはずだ…。

考えろ、考えろよ、俺。冷静に。

自分達のスピードが、上がっている。

それでも追いつかれてきてるならば。

「奴らのスピードが、上がっているのか？」

えっ、と姿は確認出来ないが中谷が言った。

One day 漆黒の疾走（後書き）

第六話投稿します（＾）ゞ

執筆スピードは二年間程、書いてて、かなり上がってくれました。

調子さえのればたくさん書きます？

みなさん、感想、評価お願いします。

自分の生きがいとなってますorz

O n e d a y 休めない安息の地

「さ、桜木。いまなんて？」

「中谷、トンネルに入ってから奴らのスピードが上がってる？」

みんなが動揺している。

「だ、大丈夫だ。もう、出口が見えてきた。」

前を確認すると、トンネルの真っ暗では月がある外は明るく見えていた。

「あうああああ？」

えっ？

桜木が後ろを見ると…

奴らの一体と目が合った。あり得ないほど、近い、というかこの距離、2 mぐらいしかない。

「川端！まずい。追いつかれた？」

「え、えええええ？」

川端は驚いたが、女子達は男子に連れられて走っているためか、反応する体力も残っていなかった。

「みんなまじで走れ？」

中谷が叫ぶが、スピードは上がった気がしない。

後ろを見れば、ますます奴らが、近くなっていた。

「まずい、本当にマズイ？」

それでも尚、手を離して逃げてやろうと思わないのは、咲さんのおかげであつた。

「あと…あと少しだ！」

中谷が再び叫んだ。桜木が前を確認すると、あと100mもないであろつかという距離になっていた。トンネルを出れば、まだ、なんとか自由に動き、逃げられる。

しかし奴らとの距離はすでに手を伸ばせば届く距離になっている。

「あううあうああああ??」

ついに奴らの一体が叫び、腕が振り下ろされる。

しかし背中をなんとか海老反りにして、間一髪で避ける。

「く、ぐぐ…。」

かなり苦しくなってきたいて、つい言葉が出てしまった。

このままじゃ、俺死ぬんじゃないか？

「さ、桜木君…。」

「ラスト？50mぐらいだ。走り切るぞ？」

川端が叫ぶ、しかし桜木ははまだ、恐怖の絶頂にあった。

「く、頼む。間に合え、間に合ってくれよ。」

外の光が広がり、トンネルが終わる！

そう思ったときだった。

「あうああああ??？」

奴らの腕が振り下ろされ、桜木の背中を直撃した。

「ぐああああ！」

あまりの痛みに、さっきまで猛スピードで走っていた足がほつれ、絡み、体のバランスが、崩れていく。

「あ、あと少しだったのに……な。」

いま転んでもトンネルの外には出れないだろうし、逃げきれないであろう。

死の恐怖が心を覆った。

その時グンツと右手が強く引かれた。

「さ、咲さん。」

強い力で引かれた、バランスを崩していた自分の体は、対空時間が延び、トンネルの外に飛び出すと、ぐるぐると転げていった。

「ぐぐぐ…。痛つてー。」

痛みの中に、再び奴らの恐怖が戻り、後ろをゆっくりと振り返った。桜木はつい唾を飲んだ。

だがしかし、そこにはもう何もいなかった。

「え、あ、た、助かった…。」

何故、奴らがこちら側へ来ないのかわからないが、助かったことには違いない。いまは生きてる事実を祝っていたかった。

「うおおおしゃー!」

中谷や川端が喜びの雄叫びを上げ、女子達は再び泣き始めた。

しばらくすると、右に公園が見えたので、そっちにいくことにしたが、桜木は背中中の怪我で、川端は怪我と疲れから、肩を貸してもらわないと歩けない状態だった。

「咲さん、藤谷さん、すいません。」

「さ、桜木くん、気にしないでいいわよ…。」

「いつか、この借りは返してもらうつからいいわ。」

そうだ、藤田 水希はクラス1を誇るキツイ女子だった。こんな時代にものなつて、仁義、と書写の半紙に書いていた女子である。

公園に到着すると、ベンチから声が飛んできた。

「おい、お前ら？まさかゾンビに噛まれたりしてないだろうな。」

声の主はうちの学校のガキ大将、

織田 亮であった。

「噛まれてたら縛り上げるぞ。」

「ははっ、亮さん何のプレイですか。」

亮の言葉に反応するのは、亮の子分で、どんなときも一緒にいる上谷 裕志であった。

「織田、悪いんだがベンチを貸してくれないか？桜木と川端が怪我をして……」

「噛まれたのか答える？」

餓鬼……と藤田さんが呟いたのを咲さんが聞いてオドオドしていた。

「お、織田、俺らは噛まれてはいない……。引つ搔かれたんだ。」

桜木が言うと、中谷が再び交渉に入ろうとした。

「そ、そつだ織田。だから…」

「ダメだな。」

なっ…と中谷が驚き、言葉をなくした。

「引っ掻かれただけとは言っても、やられたのは事実だ、うつってたらどうする。」

「そつだ、そつだ。あんな気持ち悪い…。」

織田の言葉に再び上谷が相づちを入れる。

「ま、まて織田。奴らがあんなつたのはうつるのか？」

「知らねえよ。でもあいつらゾンビだろ。」

ちよつと待てよ、と黙っていた川端が呟いた。

「ちよつと待てよ織田！奴らは確かにおかしいところもあつたが、クラスメートをゾンビとか言つなよ。」

「うつせえな、バカワバタは。」

「おい、いまなんて言つた。」

川端と織田は小学生の時から犬猿の仲で、実際喧嘩が起きたこともあつた。

「ま、まってくれ、確かに、クラスの奴らはゾンビみたいにはなつ

てしまったし、事実、奴らに桜木や川端は引っ掻かれてしまった。だが、引っ掻かれただけで、奴らのようになるか？」

織田は少し考え言った。

「そ、それは…なるかも知れないだろ？」

まあ確かに、可能性はないわけではないだろうが…。

「答えはNOだ。ならない。」

O n e d a y 休めない安息の地（後書き）

七話目UPさせていただきました（ ^ ^ ） /

かなり登場人物が増えて出てきました。
なかなか動かすのも大変です。

次話、O n e d a y 編完結となります。

前回、七話で完結させると言っておきながらすいません。

感想、評価、お待ちしております。
ぜひお願いします。

次回投稿は明日、23日投稿予定です。

O n e d a y 感染ルート

中谷が手で顎に触りながら答えた。あの時の中谷は異様な思考能力を発揮した。

「なんでだよ。亮さんになると言ってるんだぞ。」

上谷が織田の正当化を権力によって確立しようとする。

「クラスの奴らみたいにゾンビのようになる『何か』が感染するものでしょう。」

織田は、ああとだけ言うつと中谷の話を聞き始めた。上谷もそれに続き黙った。無論、桜木などは喋らなかった。

「その『何か』はまず空気感染はあるのかと考えたときだ、もし感染するならば、何故、クラスのみんなと同じ部屋にいた俺や桜木、織田達は感染しなかったか…運がいいとかだったら仕方がないが、その『何か』が空気感染ではないと考えるべきだ。」

確かに、と川端が言った。

「そして、引つ搔かれただけで奴らのようになるか、また噛まれるとゾンビのようになってしまうのか、だが…」

中谷を遮るように織田が言った。

「『何か』が狂犬病だったらありえるんじゃないか？ゾンビ共は公園側へはこないのは、近くにある池を怖がっているとか。」

織田の言うことも筋が通っている。狂犬病は別名、恐水症とも言われ、水を怖がり、噛まれれば病はうつる。

「池があるのは知らなかったな…。確かに俺も狂犬病は考えたが、クラス全員がほぼ同じタイミングでしかも短時間でかかっている、施設の離れた女子もだ。犬にそんな大量人数が噛まれれば、大事件に発展するはずだ。つまり噛まれたりしても…」

あれ…桜木は奇妙な感覚に襲われていた。

…い……か……わ……

中谷の言葉が徐々に失われていく。
そして桜木は中谷の説明を聞き終えず、ついに前のめりに倒れたのだった。

O n e d a y 感染ルート（後書き）

八話目を投稿させていただきました（ ^ ^ ） /
かなり短くなつてしまいました：すいません

この話にてO n e d a y 編終了となります。

次話からS e c o n d d a y 編となりますが、これからよろしく
お願いしますm（ _ _ ） m

感想、評価ドシドシお待ちしております。

S e c o n d d a y目を覚ませば(前書き)

更新遅れました。

ようやくS e c o n d d a y編開始です。

Second day 目を覚ませば

桜木は痛みで目を覚ました。

「体が…動かねえ。しかも痛っつー。」

意識が徐々に覚醒していくにつれ、昨日のこと思い出していった。

「現実なんだよな。」

身体の痛みと公園のベンチの硬さがリアルを感じさせた。

「桜木、目を覚ましたのか。良かった、良かった。」

ついてきた女子三人の中にいた、真矢 綾子が言った。

姉御肌の真矢は面倒見が良く、極度のイタズラ好きであったがクラスでも人気のある存在だった。

「もう、急に倒れたからびっくりしたよ！とりあえず、川端君達呼んでくるね。それまで楽しんで。」

と真矢はニヤニヤしながらさつていった。桜木は身体が完全に覚醒してから真矢がニヤニヤしていた理由に気が付いた。

「のわああああ？さ、咲さん？」

桜木の右手を握りながら、咲さんがベンチに頭を掛け寝ていたのだ。

「うーん…え…あっ？」

桜木の声で起きると、握りしめた手をさっ、と咲は手を引いた。

「え…さ、桜木君。」

「咲さん？」

その直後、桜木は咲に抱きしめられた。

「えーーーーー？」

動揺のあまり、桜木は動けない。

「もう、桜木君、心配したんだからね。」

目がつるうつろとしている咲さんのあまりの可愛さで桜木はもらい泣きしてしまった。

「朝から暑いぞ、家へ帰ってからやってくれ。」

えっ？足側にあつたベンチに藤谷がいた。見えていなかった桜木はかなり驚いた。

「桜木！…あつ、とお邪魔か？」

川端が真矢に連れられてやってきたが、とんぼ返りに引き返そうとした。

「お、おまえら…めんどくせえ？」

真矢がニヤニヤしているところを見ると、どうやら咲さんの行動以外、仕組まれてたらしい。

「とりあえず良かった感染はやっぱりしていなそうだ。」

中谷が安心してため息をついた。

「いやしかし、中谷の説明中、タイミング良く倒れるからびっくりしちゃったぜ。」

川端が笑いながら言った。

「俺はなんで倒れたんだ？」

「多分…血が抜けたせいじゃないか？」

「出血多量というやつだ。」

中谷の説明に藤谷さんが補足した。

「俺、そんな血が出てたのか…。」

桜木が背中を確認するため体を曲げようとしたときだった。

「動くな！古傷が開いて、また血が出てても何もしないぞ。」

藤谷さんがキツイ言葉で桜木に警告した。

「血を止めるのも大変だったんだぜ？咲さんが薬草にたまたま詳しくあったからいいものを。」

川端の言っていることを確認すると、どうやら咲さんに、命を救われたようだった。

「咲さん、ありがとう。」

う、うん、ただ咲さんは言っと、真矢の後ろに隠れた。

Secondary 目を覚ませば（後書き）

実は現在スランプになりまして、更新、執筆遅れています。お許しください。

Secondaryリレーの疫病神

「なあ、織田達は？」

さつきから織田達の姿がなかった。

「ああ…織田か。」

「織田なら金魚のう　こと石原を連れて…」

「藤谷、金魚のフンだぞ。」

ハッ、と真矢に指摘された、藤谷は赤面していく。

「と、とりあえず石原もいたのか？」

桜木は気絶していたので、石原の存在は知らなかった。

むしろ、石原なんて奴が生きているとは、まったく思えなかった。

石原　智史はThe　ガリ勉君という、キャラで頭はとんでもなくよかった。しかし、ニキビだらけのブサイクな顔で、なにより性格がとにかく悪かった。

桜木が行く学校には、3クラス対抗の全員参加リレーが二ヶ月に一回行われていたが、石原はバトンを受けても、歩く方が早いぐらいのスピードでしか走らず、石原は『リレーの疫病神』とも呼ばれていた。

そんな石原が、奴らから逃げ切れるといのは、ある意味信じられない

かった。

「石原って、織田のグループにいるんだよね…。」

川端がボソツといった。

「ああ、しかも織田には上っ面だけいいから、気に入られててタチが悪い。」

中谷も石原には、好印象は持っていなかった。

「藤谷さん、織田達を呼んできてもらえますか。」

うん、まかせといて。と藤谷さん池の方へと走っていった。

明るくなって気付いたが、大きな池が公園のすぐ先にあつて桜木は驚いた。

「一晩考えたんだけど、映画みたいに感染症や伝染病でゾンビにならないとなると、何が原因でなるのか、その仮説が出来たんだ。」

やはり、中谷はすごい…俺ら凡人とは桁が違う。

「なんだよ、呼んだか？」

織田が、大きな声でいいながら、歩いてやってきた。

その後ろには、藤谷さん曰く中谷のう この神谷と石原もいた。

Secondaryリーの疫病神（後書き）

十話目やっとう更新します。

キャラが増えていつてしまい申し訳ない限りです。そのうち、キャラ説明も書こうかな、と思ってます。

おかげさまでスランプは治りつつあります。

これからも応援よろしくお願いします。

誤字、脱字ありましたら、指摘お願いします

感想、評価お待ちしております。

Second day 【アルファ】

中谷、川端、織田、神谷、石原、真矢、藤谷、咲さん、自分を含め人間として、生き残った9人が桜木のベンチの近くへと集まった。

「みんな、まず聞きたいことがある。自分の班を教えてください。」

各々が班を伝えた。

桜木、川端、中谷の三名は四班。

織田、神谷、石原の三名は一班。

真矢は二班、咲さんは三班、藤谷は五班であった。

「まず、班が七つで班員はどの班も五人ずつ、班員は四班以外、男子三人、女子二人、どこもこれは間違いないね？」

中谷の言葉にみんなが頷いた。

「では、その七つの班のうち、全滅は六班と七班、女子達がいた、二班、三班、五班は四人ずつ…」

「死亡。」

石原が中谷が躊躇した言葉をあっさりと言った。

「織田達の一班会二人が死亡した。」

情報が整理されたところで、一度、間があいた。

「六班と七班は自由行動はまったく同じだったはずだ。」

「確か、あの二つの班は、一緒に行動したかった、男子六人と女子四人で構成されていたはず。」

川端が班を作るところを思い出しながら言った。

「その二つの班の自由行動場所は」

「池でピクニックだったよー。」

真矢が笑顔のまま言った。

補足だが、真矢の笑顔はもとの顔の状態だ。

「一班は、どこへ行ったんだっけ？」

池だ、と織田が言ったあと、すぐ神谷が続けた。

「あつ、でも男子三人は公園のベンチで寝てました。ねえ織田さん。」

「女子はどこへ行ったんだ？」

答えを遮り、中谷が強い口調で聞いた。しかし、織田も神谷も知らないように首を傾けた。

「池に行った。間違いない。」

石原が無表情のまま、棒読み言った。

石原は本当に何を考えているのか伝わらない、そこに桜木は不気味さを感じていた。

「まさか、池に行くと…。」

川端だけでなく、桜木も勘付いていた。

「真矢さんは？」

「池だ。私も班のみんなと池でご飯を食べた。」

川端、桜木の考えが崩れた。

「わ、私も池です。」

咲さんがドギマギしながら言った。ちなみに、この時、桜木もドギマギしていたのが、みんなにもばれていた。

「私も池だったわよ。」

藤谷さんも手を挙げた。

「中谷、どういうことだ？」

桜木がみんなの疑問を代表して言った。

「多分、池に行った人がゾンビになっている。これは間違いない。」

「でも、俺や神谷はゾンビに、なっていないぜ？」

中谷が顎に触れた。

「と、なると、池＋の何かがあるはずなんだ。このゾンビになる原因なんだと思う。」

がわかれば、まだ安心して動けるのだが…と、思った桜木だったが、いまだ激痛が走るので、歩ける状態ではなかった。

Secondary 【アルファ】（後書き）

そろそろテストが始まるので、更新遅れます（ ）（ ）（ ）
Z Z Z Z Z

Second day 食べ物に分ける〈前編〉

しばらくの間、みんなについて考えていたが、ただ時間だけが過ぎて行った。

「なあ、腹減ったんだけど。」

神谷の一言でみんなの集中力が切れた。

「俺も腹減ったぞ。誰か飯持っていないのか？」

織田も不満の声を上げた。

「もう11時過ぎてるからな。」

唯一腕時計を持っていた藤谷が言った。

「誰も食べ物を持ってないのか…。」

中谷がみんなに質問した。

「俺は持つてるぞ。」

声を上げたのは、石原だった。

「じゃ、じゃあ…」

川端が言い終わる前に、石原は遮った。

「無論、あげないが。」

わかってたことだろ、と川端の耳元に桜木は囁いた。

「俺にはくれるんだよな。石原。」

「やだね。」

織田派の石原がそのリーダーの織田に逆らうのは、あまりに衝撃だった。

「な、なんでだよ、石原。」

そう言ったのは織田ではなく、神谷の方だった。

大方、織田からおこぼれを貰おうとでも考えたのであろう。

「神谷、どういうことだ！」

織田も神谷の想定外の謀反にかなり怒りを感じているようだった。

「ま、まずいんじゃないんですか？」

咲さんが桜木の手を握ってきた。

うん、確実に体に悪い…。

S e c o n d d a y 食へ物は分けるへ前編 (後書き)

テスト勉強のやる気なくなると、小説に逃げています。

まだまだ頑張りまーす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5873y/>

友とともにゾンビ

2011年11月30日21時51分発行